えと記す最古の木簡

兵庫の遺跡　「壬子三年　」の文字

阪神大震災の被災マンション跡から出土した木簡。「三　壬子年」（壬子三年＝六五二年）と、最古とみられる年代が記されていた

兵庫県芦屋市三条町の三条九ノ坪遺跡から一九九六年に出土した木簡にあった「壬子（じんし）三年」の文字が、制作年のえとを表し、年代を記した木簡としては最古のものであることが十一日、県教委埋蔵文化財調査事務所の調査で分かった。周囲の土器の年代から、白雉（はくち）三年（六五二年）に該当するという。

木簡の年代記載は、七〇一年に始まる「大宝」から年号を使うようになっているが、それ以前は十干十二支で記録していた。えとの記述のものは奈良県の藤原宮跡で発見された「辛酉（かのととり）年」と書かれた六六一年の木簡が最古とされていた。

遺跡は、阪神大震災の被災マンション再建工事で確認された。木簡はヒノキ製で下部が欠け、長さ十九・九五㌢、最大幅三・三㌢、厚さ〇・六㌢。表は「三壬子年□」、裏には「子卯丑□向」と墨書されている。

木簡は現在、姫路市の県立歴史博物館で開催中の特別展「三万年の旅」で初公開されている。

原秀三郎・千葉大学教授（日本古代史）は「文書による行政支配が六四五年の『大化の改新』から間もない時に国中央で進んでいた証拠と思う。頭が丸い形状は珍しく、中国様式をとり入れているのではないか」と話している。

（朝日新聞　１９８９．１１．１２　朝刊　第2社会　３８面　１３版　より転載。　一部分加工しています）